

気になる子どもの保育における効果的な巡回相談 スタイルの実践的検討

— 保育所（園）長アンケートの分析 —

阿部 美穂子

A Practical Examination of Effective Style in Itinerant Consultation for Children with Special Needs in Childcare Service

— Analysis of the Questionnaire to Childcare Director —

Mihoko ABE

E-mail : mabe@edu.u-toyama.ac.jp

摘 要

本研究では、気になる子どもの保育に関する巡回相談について、これまで指摘されてきた回数の不足や、保育士の訪問者に対する依存性等の問題を解消するための仕組みを組み込んで巡回相談を企画・実施し、終了後、対象となった24の保育所（園）長に対して行ったアンケート調査に基づき、効果的な巡回相談のスタイルについて考察した。その結果、訪問者のファシリテートにより、複数の保育士で協議する仕組みとそれを支えるための枠組みの提示、保育士の対応の肯定的な評価、保育士が見落とししていたり、気付いていない視点の提案、負担感の少ない保育所（園）の実情に応じた訪問体制のアレンジ等が有効であると考えられた。

キーワード：気になる子ども 巡回相談 保育カンファレンス 相談スタイル 保育の専門性向上

keywords : Children with special needs, Itinerant consultation, Childcare conference, Style of consultation, Improve professional childcare

I 目 的

近年、保育上の課題として発達障害のある子どもをはじめとした「気になる子ども」への対応の困難さが挙げられている。そのため、対応方法や保育内容に関する保育士への支援の必要性が高まってきている。そうした気になる子どもに携わる保育士への支援方法の1つに巡回相談があげられる。巡回相談とは「専門機関のスタッフが保育園、幼稚園を訪問し、子どもの園での生活を実際に見た上で、それに即して専門的な援助を行うこと」（浜谷2005）と定義されている。しかし、そのスタイルは統一されたものではなく、自治体や地域によって多様なスタイルの巡回相談が展開されており（日高・橋本・秋山2008, 権藤2006）、個々の訪問者の経験や判断等に任せられている現状である（浜谷2005）。秦野（2009）は「訪問者は、保育で直面している具体的問題解決についての緊急対応的な保育ニーズにこたえることが優先されがち」で「訪問者も巡回相談を

利用する側も積み上げてきた実績がない分、保育臨床現場における支援のあり方には共通のコンセンサスがあるとはいえない。」と指摘している。

これまでの巡回相談では、以下のような問題が指摘されている。1つ目は、巡回相談の回数が不足していることである。年に1, 2回しか行われていない事例が多い（大村2009）。2つ目は巡回と巡回の時期が大きく開いており、定期的・継続的な支援がされていないことである（大村2009, 浜谷2005）。3つ目は保育士の専門家に対する依存が起りやすいこと（浜谷他1990）である。相談する保育士側は、訪問者のアドバイスを専門家の意見として主体的に吟味することなく受け入れてしまい、さらに「悩みを相談すれば専門家が解決してくれるはず」という過度な期待を抱き、納得できない結果になれば逆に専門家に対して深い不信感をもつという、一見矛盾する「期待」と「不信」という二律背反する利用者心理が作り上げられる可能性もある（秦野2009）という問題も生まれてくる。

このように保育所における巡回相談活動は、保育士の資質や専門性の向上のための活動として、保育士支援の重要な活動の1つとなっているものの、訪問した訪問者がどのような活動を行うのが、訪問先にとって効果的であるかについては、いまだ十分な検討がなされているとは言い難い状況である。すなわち、訪問者は手さぐりで巡回相談を行っていると言える。巡回相談スタイルに関する事例的研究はこれまでもなされてきている（浜谷2005、吉田・岩元・林2007、米田2007、大村2009）が、巡回相談に関する理論的な研究はまだ少なく、浜谷（2005）は今後、理論的な枠組みに依拠しながら相談活動を反省して訪問者の専門性を高めることができる状況を作る必要があると述べている。そこで本研究では、実際に「気になる子どもを対象とした巡回相談」を実施し、それを受けた側の評価に基づき、巡回相談の効果とそれをもたらしている巡回相談のスタイルについて検討する。本研究における巡回相談のスタイルとは、巡回相談の実施方法であり、訪問回数、頻度、コンサルテーションの手順や形態等の総体を指す。また、本研究における「気になる子ども」については、郷間ら（2008）の定義を参考に「診断の有無に関わらず、保育士にとって保育が難しいと考えられている子ども」とする。具体的には、気になる子どもの保育に関する巡回相談を希望する保育所（園）に対して、これまで指摘されてきた巡回回数の不足や、訪問者への依存性等の問題を解消するための仕組みを組み込んで巡回相談を企画・実施し、その結果について、当該保育所（園）長にアンケート調査を実施する。それに基づき、保育現場で求められている、効果的な巡回相談のスタイルについて考察する。

II 方 法

1 検討対象とする巡回相談

A 県が主催する事業によって行われる巡回相談である。本事業は A 県臨床心理士会が委託を受け、20xx年7月～2月に24の保育所（園）を筆者を含む12名の臨床心理士が分担して訪問した。相談は1園あたり1名の臨床心理士が担当した。各訪問者の担当訪問先数は、1～5箇所（園）であった。相談対象者は気になる子どものクラスの保育士、園長、主任等の複数の保育士であった。24保育所（園）は、

A 県が年度当初の5月に巡回相談の希望を募った際、応募した55保育所（園）の中から、希望理由の緊急性や事例の対応困難性の高さ、及び県内の訪問地域のバランスを勘案して、臨床心理士らと A 県担当者の協議の結果、巡回相談開始1か月前までに最終決定された。

本巡回相談を実施するに当たり、これまで先行研究で指摘されてきた巡回相談の問題点を解決するため、以下の4点の特質を組み込んだ。まず1つ目であるが、従来指摘されてきた巡回相談回数の不足を解消するため、1園あたりの巡回回数は年6回とした。1か月～2か月に1回の頻度で訪問し、1回の訪問時間は約4時間程度であった。訪問者は、毎回気になる子どもの参与観察と保育士に対するコンサルテーションを実施した。最後の1回はフォローアップとし、巡回相談のまとめと、巡回訪問によって得られた成果について、子どもと保育士自身の変容を中心にふりかえる話し合いの場とした。

さらに、2つ目として、保育士自身が対象となる子どもの観察に基づいて、その発達上の課題を評価し、保育における問題解決を目指すことができるように、「気になる子どものチェックリスト試案（以下、チェックリスト）」（小林他2009）を使用、及び「子どもの行動の分析&支援シート（以下、支援シート）」（図1）を作成して、それに保育士らが記入しながら、気になる子どもの対応すべき行動の優先順位を決め、具体的な支援方法について検討できるようにした。チェックリストは、対象児1名につき、A4サイズ用紙2ページで、33のチェック項目からなる。項目については、広汎性発達障害の特徴に関して14項目、注意欠陥多動性障害の特徴に関して14項目、知的障害の特徴に関して5項目を取り上げ、それぞれ「まったくあてはまらない=1」、「ほとんどあてはまらない=2」、「ややあてはまる=3」、「よくあてはまる=4」の4件法でチェックする。巡回相談の初回時までには、取り上げる対象児をよく知る担任、副担任等の保育士と管理的立場にある保育士計3名以上に本チェックリストを記入してもらい、第1回目のコンサルテーションで、そのデータを比較して、複数の保育士が対象児の実態をどのように捉えているかを協議し、共通理解するための資料とする。本チェックリストは巡回相談終了時にも記入し、対象児の変容を確認する。また、支援シートは、気になる子どもの行動とそれが起こ

子どもの行動の分析 & 支援シート

子どものイニシャル(姓.名): . . .

(1) まず、①子どもの気になる行動 → ②その行動の起きた状況・場面 → ③その行動の結果、の順に書き入れ、気になる行動がどのように起きているか確認します。

② 行動が起きた状況 (いつどこで・誰と・何をしていた時)

※いつ、どこで、何をしていた時など、具体的にきます。
他の子どもが自分の使いたいブロックを使っている。

① 気になる行動 (具体的に記述)

※「Aちゃんが、～をした」と、やったことをそのまま書きます。
 良い書き方の例： ○「叩いた」
 ○「部屋から、廊下に出て行った」
 悪い書き方の例： ×「意地悪した」
 ×「参加しようとしなかった」
友達を叩く、ブロックをひたたく。

③ 行動の結果 (どうなったか)

※ 誰が、どのように対応したか、本人はどうなったか。周りの子供はどうしたか、などその直後に起きたことを書きます。
叩かれた子どもが泣いて、先生のところへ行く。本人は、欲しかったブロックを使う。

(2) 次に、「なぜその行動が起きているのか？」理由、原因を考え、①～③それぞれに書き入れます。

② 状況や場面を分析すると…

状況が分かりにくいから？ 課題が難しいから？ つまらないから？
友達のブロックが欲しくても、どのタイミングで、相手に声をかけたらよいか分からない。

① 行動自体を分析すると…

適切な行動が身についていないから？ やり方が分からなかったから？
友達に言葉で伝えるのが難しい。

③ その行動で子どもが得る利益・メリットは…

考えられるメリットとして、以下のものがあります。
 ①先生や友達にかまってもらえるから？
 ②嫌なことをしないで済むから？
 ③欲しいものが手に入るから？
 ④こだわっている感覚を得られるから？
※ 子どもを主語にして書きます。子どもは、好きなブロックを確実に手に入れることができる。

(3) 分析をもとに、支援プランを作成します。子どもの能力に合わせて、①～③のそれぞれに記入します。

② 環境設定 (気になる行動を予防し、代わりの行動を促進するための工夫や配慮)

「前もって手を打つ」の原則
 ※ 気になる行動が起きにくいように、代わりとなる望ましい行動が起きやすいように、事前の働きかけや環境設定の工夫を考えます。
 ・**ブロック遊びを始めるまえに、他児も一緒に「貸して」という約束を確認する。**
 ・**保育士との間で「かして」という、練習をしておく。**

① 気になる行動の代わりとなる行動、およびその行動を実行できるための保育士の関わり

代わりとなる行動
 ※ 気がかりな行動の代わりになる適切な行動を考えてみましょう。高望みしないで、必ず子どもができる行動にしましょう。
 ・「貸して」という。
 ・**友達が好きなブロックを使っているとき、貸して欲しいときは、保育士に頼むようにする。**
保育士のかかわり
 ※ たとえ代わりの行動を教えても、子どもが最初からすぐにできるとは限りません。本人がうまくできるように、かかわって、援助します。
 ・**ブロック遊びを始めたら、さりげなく側に行って、「貸して」というタイミングを教える。また、子どもが援助を求めやすいようにそばにいる。**

③ 代わりの行動の結果の準備 (子どもができた時に利益を実感できるもの)

「やっただけの甲斐がある」の原則
 ※ 行動の直後に、子どもが利益や成功を実感できるようにこんな配慮をします。
 代わりの行動ができたなら、必ず本人にとって良い結果が得られるように配慮の仕方を考えます。
 ・**保育士に手伝ってもらっても「貸して」といえたら、すぐほめて、必ず貸してもらえるように仲立ちする。**
 ・**貸してくれた他の子どもに、保育士と一緒に「ありがとう」を言う。**

(4) 上記の支援を行うために、事前に配慮すべきことや、連絡、共通理解しておく事項について以下に記入します。

本人に対して…
 保護者に対して…
 他児に対して…
 保育者間の共通理解事項…
 その他留意事項…

図1 子どもの行動の分析 & 支援シート(記入例)

るメカニズムを分析し、それに基づいて具体的な支援方法を考案して記入することができるように構成し、筆者と本巡回相談担当者らが検討し、独自に作成したものである。まず、保育士が対象児の気がかりな行動や解決したい行動を取り上げ、それがどの

ような場面で起こるか、またその行動に対して周囲がどのように対応しているかを観察して書きこむ。それによって、気がかりな行動の機能を特定する。例えば、対象児が使いたいおもちゃを他の子どもが使っている場面で、その子どもを叩くと、おもちゃ

が対象児の手に入る場合、「叩く」行動は、相手に対して欲しいものを要求する機能があると考えられる。このように機能を特定したら、気がかりな行動の代わりに対象児にとって実行可能性の高い同じ機能をもつ代替行動を設定する。先のおもちゃの例であれば、「貸して」と言葉で伝える行動等が考えられる。続いてその行動の獲得を目指すための支援方法について、1点目：対象児が代替行動を起こしやすくするための環境設定や事前準備、2点目：代替行動を遂行するための保育士によるその場での直接援助の方法、3点目：代替行動遂行後の保育士や周りの子どもの対応の3点から計画するという流れからなる。

また、3つ目として、保育士の専門家への依存性を低減し、能動的に参加できるように、協議の場を設定し、従来型の訪問者が保育士を一方向的に指導するという形ではなく、訪問者のファシリテートによって保育士が自由に対象児の課題と支援方法についてのアイデアを出し合い、出てきた意見を整理し、参加者全員が支援シートに書き込んで支援計画を作り、次の訪問時まで実践するという形式で相談を行った。約1か月後に再訪問をし、実践した支援結果を確認し、問題が解決されなかった場合は新しい支援方法について再協議をし、新たに支援シートに書き込んで、実践するというスタイルをとった。

4つ目として、訪問者が実際の保育場面に臨席し、参与観察を行い、保育士が行っている保育方法や気になる子どもへの関わり方について即時に適切な方法をフィードバックしたり、すでに行われている効果的な方法についてプラスの評価をするようにしたりした。

2 効果測定のためのアンケートについて

以下の2種類のアンケート用紙を作成した。

(1) 事業効果アンケート

巡回相談事業の効果をどのように保育所(園)として評価しているかを問うものである。21項目で、「あてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、あてはまらない」の4件法で作成した。併せて、「巡回相談でよかったこと、得られたこと」「改善すべき点、残された課題」を自由記述で記入するよう求めた。

(2) 巡回相談スタイルに関するアンケート

複数の先行研究(矢吹1996、浜谷・松山・秦野・

村田1988、西本1999、三山2008)等を参考にし、さらに本巡回相談の訪問者たちが実際に行った相談活動の報告を参考に40項目からなる質問紙を作成した。項目は、巡回相談時に実施した可能性のある、保育観察、協議、アドバイス等、相談のスタイルに関するもので、項目ごとに、①訪問者が実際に行ったかどうか、②前述の①の内、子どもの変容を引き出すのに役に立ったと思うか、③前述の①の内、保育技術の向上に役に立ったと思うか、④前述の①の内、負担であったかについて尋ねる。①については、実施の有無を記入し、②③については、①で実施有とした中から、「大変役に立った」あるいは、「役に立った」ものを、④については、「負担が高かったもの」「負担だったもの」をそれぞれ◎、○で選択するように依頼した。

(3) 調査時期及び実施方法

本巡回相談事業終了1か月後をめぐりに質問紙を送付し、郵送にて回収した。

(4) 調査対象

本巡回相談の訪問先である保育所(園)の所(園)長24名。回答にあたっては、実際の巡回相談場面に参加している必要があるため、保育所(園)によっては、所(園)長代理等、日常的に保育現場に携わり、園長と同様の責任のある立場で保育の運営管理を行っている者が回答した場合もあった。

III 結 果

1 回収率

すべての対象保育所(園)より、回答があり、回収率は100%であった。

2 事業効果アンケートの結果

項目ごとの集計結果を表1に示す。項目ごとに「あてはまる、ややあてはまる、ややあてはまらない、あてはまらない」の回答が占める割合を百分率で算出した。また、前者の2選択肢と、後者の2選択肢をそれぞれ合算した割合も求めた。

また、自由記述の結果をまとめたものを表2に示す。表中の太字部分は、カテゴリであり、右側の太字の数字は、下につづく各カテゴリに含まれる記述件数の合計件数である。1保育所(園)で、複数の記述があった場合は、その内容が異なっている場合は、別々に件数として分類した。

表1 事業効果アンケート結果
(表中の数字は、項目ごとに回答数が占める割合)

	訪問内容に対する質問項目	A： あてはまる	B： ややあてはまる	A+B	C： ややあてはまらない	D： あてはまらない	C+D
1	今回の事業を実施して、気になる子どもの保育に関する悩みが解決できた。	26.1	56.5	82.6	17.4	0.0	17.4
2	今回の事業を実施して、普段から職員同士で話し合う習慣がついた。	30.4	52.2	82.6	17.4	0.0	17.4
3	今回の事業を実施して、保育士達の心にゆとりが生まれた。	20.8	37.5	58.3	37.5	4.2	41.7
4	今回の事業を実施して、保育士達の負担が大きかった。	0.0	50.0	50.0	33.3	16.7	50.0
5	今回の事業を実施して、気になる子どもについて、以前よりも理解が進んだ。	70.8	20.8	91.7	8.3	0.0	8.3
6	今回の事業を実施して、気になる子どもへの対応方法が改善された。	33.3	58.3	91.7	8.3	0.0	8.3
7	今回の事業を通して、気になる子どもを含むクラスの集団保育の方法が改善された。	25.0	41.7	66.7	33.3	0.0	33.3
8	今回の事業後の気になる子どもの変化に満足している。	16.7	41.7	58.3	29.2	12.5	41.7
9	今回の事業後の保育士達の変化に満足している。	17.4	60.9	78.3	17.4	4.3	21.7
10	今回の事業による訪問支援のやり方は、他の訪問支援に比べ、有効であったと思う。	62.5	16.7	79.2	20.8	0.0	20.8
11	本事業が終わった後も、気になる子どもへの対応を継続できると思う。	66.7	25.0	91.7	8.3	0.0	8.3
12	気になる子どもの新しい問題が出てきたら、今回の事業で得たことを参考に、自分たちで協議しながら、対応方法を考えていけると思う。	20.8	66.7	87.5	12.5	0.0	12.5
13	「気になる子どものチェックリスト」は気になる子どもを理解する際に、役に立った。	45.8	54.2	100.0	0.0	0.0	0.0
14	「気になる子どものチェックリスト」を使うことは、負担だった。	4.2	20.8	25.0	41.7	33.3	75.0
15	「気になる子どものチェックリスト」は書きやすかった。	12.5	70.8	83.3	16.7	0.0	16.7
16	「気になる子どものチェックリスト」を今後も継続して使っていきたい。	31.8	50.0	81.8	18.2	0.0	18.2
17	「子どもの行動の分析&支援シート」は気になる子どもを支援する際に、役に立った。	56.5	26.1	82.6	8.7	8.7	17.4
18	「子どもの行動の分析&支援シート」を使って支援方法を検討することは、負担だった。	21.7	39.1	60.9	13.0	26.1	39.1
19	「子どもの行動の分析&支援シート」は書きやすかった。	13.0	26.1	39.1	43.5	17.4	60.9
20	「子どもの行動の分析&支援シート」を今後も継続して使っていきたい。	26.1	39.1	65.2	26.1	8.7	34.8
21	自分の保育所(園)で、本事業を今後も継続して行ってほしいと思う。	58.3	12.5	70.8	25.0	4.2	29.2

(%)

表2 自由記述の分類

(1) 訪問でよかったことや、得られた成果		件数
1	支援方法の理解と実践について	15
	子どもの支援方法の理解が進んだ	6
	話し合ったことをすぐに実践できた	3
	保育環境が改善した	2
	援助の仕方が明確になった	1
	子どもへの声のかけ方が変わった	1
	子どもへのかかわり方が変わった	1
	継続的長期的な視点で支援するようになった	1
2	子ども観や子ども理解について	9
	保育士が子どもをとらえる観点が拡大・改善した	4
	個々に気になる子に対する理解が深まった	3
	子どもの見方が変わった	1
	子どもを認めることができるようになった	1
3	チェックリストや支援シートについて	9
	支援シートを使って、実践が整理できた	3
	支援シートを使って、子ども行動理解が深まった	3
	今後もチェックリスト、子どもの行動の分析&支援シートを利用していきたい	3
	支援シートを使って、保育士同士で実践できるようになった	1
4	保育士間の連携について	8
	共通理解につながった	4
	保育士同士のコミュニケーションや連携が進んだ	3
	自分たちの考え方が異なった時にその違いを保育力として受け止めることができた	1
5	保育士の精神面について	7
	肯定評価で保育士の意欲が高まり、保育にゆとりができた	2
	自信がいった	2
	不安が減った	1
	継続してみてもらうのが良かった	1
	勇気や希望がもたらえた	1
6	気になる子どもの家族について	2
	家族の対応方法が分かった	1
	保護者に対するの対応や考え方に少しでも寄り添えるようにという思いが強くなった	1
7	その他	5
	保育士意識改革につながった	1
	子どもにとって生活しやすい方法を考えることが周りの大人への負担の軽減につながった	1
	複数回の繰り返しの訪問が良かった	1
	複数回の訪問で、緊張せずに、信頼感が高まった	1
	すぐに実践につながり、それを踏まえて訪問日が待ち遠しかった	1
(2) 改善すべき点や残された課題		件数
1	運営面について	9
	時間帯設定が難しい	5
	協議時間が足りない	3
	勤務時間内で交替で出るので理解内容の足並みそろわない	1
2	相談員の巡回相談スタイルに関する要望	5
	もっと直接観察とその場でのアドバイスを増やしてほしい	2
	保育士の話をもっと聞いてほしい	1
	もっと遠慮せずにアドバイスして欲しい	1
	新しい視点でアドバイスして欲しい	1
3	負担や難しさについて	2
	毎回の課題（シート記入など）が大変だった	1
	シートの書き方がすぐに理解できなかった	1
4	さらなる改善へ意欲	2
	全職員体制につなげたい	1
	チェックリストの活用法をもっと知りたい	1
5	事業自体への要望	5
	今後も継続して欲しい	4
	すべての園でやってほしい	1

3 巡回相談スタイルに関するアンケートの結果 ①実施 ②子どもの変容を引き出すのに役に立ったと思う相
 集計結果を表3に示す。集計にあたり、の有無については「有」とした実数を表した。次に、

表3 巡回相談スタイルに関するアンケート結果

場面	項目番号	項目名	実施した園数		評価の満点	子どもの変容		保育技能の向上		負担		
			実数	実施率%		得点	役立ち度%	得点	役立ち度%	実数	負担度%	
観察	1	気になる子どもの行動観察をする	22	91.7	44	26	59.1	25	56.8	2	4.5	
	2	気になる子どものいるクラスの活動に参加し、子どもに直接かかわる	12	50.0	24	18	75.0	14	58.3	1	4.2	
	3	コンサルテーション実施後の子どもの変化を確認する	17	70.8	34	20	58.8	17	50.0	1	2.9	
	4	その場で保育士の関わり方や動きをアドバイスする	9	37.5	18	13	72.2	10	55.6	2	11.1	
協議	5	気になる子どもの担任との個別に協議をする	17	70.8	34	25	73.5	24	70.6	2	5.9	
	6	気になる子どもに関係する数人の保育士と協議をする	19	79.2	38	29	76.3	28	73.7	4	10.5	
	7	直接担当していない保育士を含んだできるだけ多くの保育士と協議をする	13	54.2	26	20	76.9	20	76.9	2	7.7	
	8	分析&支援シートを用いて協議をする	20	83.3	40	30	75.0	32	80.0	7	17.5	
	9	保育者のとらえている子ども像の聞き取りをする	22	91.7	44	29	65.9	27	61.4	2	4.5	
	10	チェックリストに基づき、子どもの行動特徴について話し合いをする	22	91.7	44	31	70.5	32	72.7	2	4.5	
	11	成育歴や家族歴、現在の家庭状況を把握し、分析をする	23	95.8	46	29	63.0	29	63.0	1	2.2	
	12	気になる子どもの発達の状況や特徴について話し合いをする	23	95.8	46	32	69.6	31	67.4	3	6.5	
	13	行動が起きやすい保育場面について分析する	23	95.8	46	35	76.1	35	76.1	1	2.2	
	14	行動の意味について検討する	23	95.8	46	34	73.9	34	73.9	2	4.3	
	15	行動への具体的な対応方法を検討する	24	100.0	48	37	77.1	38	79.2	2	4.2	
	16	支援後の子どもの問題行動の変化の確認をする	23	95.8	46	29	63.0	30	65.2	2	4.3	
	17	支援後に有効な支援方法のまとめをする	20	83.3	40	28	70.0	28	70.0	4	10	
	18	子どもに分かりやすい言葉かけの仕方を検討する	21	87.5	42	34	81.0	34	81.0	1	2.4	
	19	現在の発達状況に応じた保育内容を検討する	15	62.5	30	18	60.0	21	70.0	0	0	
	20	座席の配置や、活動の順番など、日常的な配慮の仕方を検討する	17	70.8	34	24	70.6	23	67.6	1	2.9	
	21	集団活動への参加を可能にするための手立てを検討する	20	83.3	40	28	70.0	30	75.0	0	0	
	22	保育士同士の連携協力のしかたについて共通理解する	17	70.8	34	27	79.4	29	85.3	0	0	
	23	周りの子どもの対象児に対する関わり方について検討する	18	75.0	36	23	63.9	21	58.3	1	2.8	
	24	他児とトラブルが起きた時に、双方の気持ちに納得できるような対応方法について検討する	16	66.7	32	23	71.9	22	68.8	2	6.3	
	25	保育室のレイアウトや掲示物等、環境の問題点を分析する	8	33.3	16	12	75.0	13	81.3	1	6.3	
	26	指示が理解しにくい場合、子どもがわかりやすい環境設定の方法を考える	14	58.3	28	17	60.7	20	71.4	0	0	
	アドバイス	27	気になる子どもを見る時の保育士が気付かなかった視点を新たに提案する	19	79.2	38	30	78.9	31	81.6	0	0
		28	気になる子どもの良かった点について気付く視点を提案する	19	79.2	38	27	71.1	26	68.4	0	0
		29	支援方針や保育方法を検討する際の観点を提示する	18	75.0	36	27	75.0	27	75.0	1	2.8
		30	個別の障害に関する基本的な知識に関する概説をする	11	45.8	22	16	72.7	16	72.7	0	0
31		子どもへのかかわり方の基本的な理論に関する解説をする	13	54.2	26	21	80.8	20	76.9	0	0	
32		気になる子どもへのかかわり方のロールプレイングをする	6	25.0	12	9	75.0	10	83.3	0	0	
33		保育士が現在行っている関わり方が子どもに与えている影響について伝える	18	75.0	36	22	61.1	22	61.1	1	2.8	
34		すでに行っている支援内容や方法に対して肯定的な評価をする	22	91.7	44	29	65.9	31	70.5	1	2.3	
35		保育士の努力に対するねぎらいをする	21	87.5	42	27	64.3	27	64.3	0	0	
その他	36	園長等の管理職と個別の情報交換をする	14	58.3	28	18	64.3	14	50.0	1	3.6	
	37	職員体制の見直しに関してアドバイスをする	2	8.3	4	3	75.0	3	75.0	0	0	
	38	対象児の保育に伴って生じる保育士のストレスや悩みに対する相談を行う	13	54.2	26	19	73.1	20	76.9	0	0	
	39	保護者との連携の方法についての検討をする	17	70.8	34	22	64.7	22	64.7	0	0	
	40	他の専門機関との連携の必要性の検討をする(専門機関の情報提供をする場合も含む)	11	45.8	22	15	68.2	15	68.2	0	0	
		平均				70.5		70.0		3.5		
		標準偏差				6.22		8.83		3.85		

談スタイル，③保育技術の向上に役に立ったと思う相談スタイルについては「大変役に立った」を2点，「役に立った」を1点，無記入を0点として計算した。④負担であった相談スタイルについては，「負担が高かった」を2点，「負担だった」を1点，無記入を0点として計算した。次に各項目ごとに得点を加算し，実施した園の総数に2点をかけたものを満点とし，項目ごとに加算点を満点で割って，百分率を算出し，得点率とした。実施した保育所（園）の評価がすべて2点の場合100%の得点率となる。この得点率を②，③については「役立ち度」，④については「負担度」として表した。

IV 考 察

1 事業効果アンケート結果から

(1) アンケート項目ごとの分析（表1より）

質問項目の[1 今回の事業を実施して，気になる子どもの保育に関する悩みが解決できた][2 今回の事業を実施して，普段から職員同士で話し合う習慣がついた][3 今回の事業を実施して，保育士達の心にゆとりが生まれた][5 今回の事業を実施して，気になる子どもについて，以前よりも理解が進んだ][6 今回の事業を実施して，気になる子どもへの対応方法が改善された][7 今回の事業を通して，気になる子どもを含むクラスの集団保育の方法が改善された][8 今回の事業後の気になる子どもの変化に満足している][9 今回の事業後の保育士達の変化に満足している]までは，巡回相談の結果もたらされた効果を問う項目である。このうち，1，2，5，6，9については，「あてはまる，ややあてはまる」の回答率が70%を超えており，本巡回相談の結果，大部分の保育所（園）で，保育士の気になる子どもの理解と対応方法への改善がなされ，保育士の悩みが解決されるとともに，保育士間の話し合いの習慣が形成されたと保育所（園）長らが判断していることが分かった。保育士達の心のゆとりや，気になる子どもを含む集団保育の方法の改善，気になる子どもの変化の満足度については，50～60%台にとどまっており，子どもの理解や対応方法の改善ができて，半数弱の保育所（園）長らは，自らの保育やその成果に十分満足しているわけではなく，継続して対応に取り組む日々を送っていることが推測される。

[10 今回の事業による訪問支援のやり方は，他の

訪問支援に比べ，有効であったと思う][11 本事業が終わった後も，気になる子どもへの対応を継続できると思う][12 気になる子どもの新しい問題が出てきたら，今回の事業で得たことを参考に，自分たちで協議しながら，対応方法を考えていけると思う]の質問項目は，本巡回相談のスタイルが保育士らに受け入れられるものであり，巡回相談終了後も保育所（園）において継続可能な，気になる子どもの支援体制整備に寄与するものだったかどうかを問う項目である。この3項目については，いずれも「あてはまる，ややあてはまる」の合計が70%以上の回答率であった。特に[11 本事業が終わった後も，気になる子どもへの対応を継続できると思う]の回答率は91.3%，[12 気になる子どもの新しい問題が出てきたら，今回の事業で得たことを参考に，自分たちで協議しながら，対応方法を考えていけると思う]の回答率は87.0%といずれも高率を占め，これまで巡回相談の問題とされてきた，保育士が訪問者に依存してしまい，能動的に参加しない傾向（浜谷他1990）を解決する巡回相談スタイルを実現できたことが示唆される。これは，前述したとおり，問題解決型のコンサルテーションを行うため，チェックリストや支援シートを導入し，保育士らが自ら気になる子どもの行動とそれが起こるメカニズムを分析し，それに基づいて具体的な支援方法を考案して記入することができるようにしたことや，訪問者のファシリテートによって保育士が自由に対象児の課題と支援方法についてのアイデアを出し合い，支援計画を作って実践する協議形式を取り入れたことが有効であったと考える。このように本巡回相談が保育所（園）における支援体制の構築に寄与できたことが示唆される。

一方，[13「気になる子どものチェックリスト」は気になる子どもを理解する際に，役に立った][14「気になる子どものチェックリスト」を使うことは，負担だった][15「気になる子どものチェックリスト」は書きやすかった][16「気になる子どものチェックリスト」を今後も継続して使っていきたい][17「子どもの行動の分析&支援シート」は気になる子どもを支援する際に，役に立った][18「子どもの行動の分析&支援シート」を使って支援方法を検討することは，負担だった][19「子どもの行動の分析&支援シート」は書きやすかった][20「子どもの行動の分析&支援シート」を今後も

継続して使っていきたい]の項目は、先に示した支援体制整備のアイテムとして導入したチェックリストと支援シートの機能性を問う質問項目である。「あてはまる、ややあてはまる」の合計がチェックリストに関しては、いずれも80%以上の肯定評価であり、負担度も21.7%と低く、使いやすいアイテムであったことが分かった。一方、支援シートは、[17「子どもの行動の分析&支援シート」は気になる子どもを支援する際に、役に立った]81.8%と高率の回答を得たものの、[18「子どもの行動の分析&支援シート」を使って支援方法を検討することは、負担だった]59.1%、[19「子どもの行動の分析&支援シート」は書きやすかった]36.4%であり、有効と分かっているにもかかわらず負担度が高いと判断した保育所(園)長が多かったことが分かった。支援シートは、協議の場で記入するものであり、事前の準備を必要としない。従来の巡回相談の多くが、対象児のプロフィールや身辺自立などの実態、保育経過等、多方面にわたる情報を資料として事前に用意しなければならないスタイルをとっており、保育士の準備にかける負担を軽減するため、協議しながら書き込める形式を採用した。しかし、実際の協議場面では、これまで子どもの行動を分析する経験自体が少なかった保育士の中には、何を書きこめば良いのか戸惑う者も多かった。そのため、このようなアンケート結果となったものと考えられる。しかしその一方で、[20「子どもの行動の分析&支援シート」を今後も継続して使っていきたい]が68.2%を占め、保育所(園)長らは、たとえば、負担度の高いものであっても有効性を優先して、支援体制の構築に活用したいと願っていることが分かった。

最後に、[4 今回の事業を実施して、保育士達の負担が大きかった]の項目では、「あてはまる、ややあてはまる」の合計が52.2%であり、外部からの継続的に訪問し、協議を行うことは日常の保育活動をやりくりする上で、負担が高いと判断した保育所(園)長が半数を占めたことが分かる。その一方で、[21 自分の保育所(園)で、本事業を今後も継続して行ってほしいと思う]が、69.6%を占めた。これは、先の[10 今回の事業による訪問支援のやり方は、他の訪問支援に比べ、有効であったと思う]の回答率78.3%と併せ、負担度が高くても、本巡回相談のやり方で得られる成果を優先したいと願っていることが示唆された。

(2) 自由記述の分析(表2より)

訪問でよかったことや、得られた成果は、「支援方法の理解と実践について」「子ども観や子ども理解について」「チェックリストや支援シートについて」「保育士間の連携について」「保育士の精神面について」「気になる子どもの家族について」と、その他を含む7つのカテゴリーの自由記述が得られた。

最も記述が多かったのが、「支援方法の理解と実践について」の15記述であり、保育所(園)長らは、巡回相談によって保育士が支援方法を理解しただけでなく、「子どもへの声のかけ方が変わった」「子どもへのかかわり方が変わった」のように、実際に保育士の支援方法が変わったことを実感している。同様に、保育士の子ども観や子ども理解、保育士間の連携についても「変わった」ことを実感する記述が見られた。保育士の意識が変革するだけでなく、実際に保育が目に見える形で変化することこそが巡回相談の意義であり、本巡回相談のやり方が、保育に実質的な変化を起こすことに役だったと言える。支援シートに関する有効性についても複数肯定意見があり、先の項目ごとの評価を裏付ける内容となっている。さらに、保育士の精神面のゆとりや意欲の向上、自信の伸長に関する記述が7件あり、保育士のそれまでの取り組みを受け入れ、それを肯定評価して、次の支援に発展させていく、臨床心理士ならではの対応が保育士らの精神面でのサポートにも役立ったことが推察された。一方、先に示した項目ごとの分析では、本巡回相談を負担に感じていた保育所(園)長らが半数を占めていたが、自由記述の中には、「複数回の繰り返し良かった」「複数回の訪問で、緊張せずに、信頼感が高まった」「すぐに実践につながり、それを踏まえて訪問日が待ち遠しかった」など、実施頻度に対する肯定的評価が記述されており、負担感はあるものの、効果の実感が保育士の巡回相談への参加を支えていることが見て取れた。

改善すべき点や残された課題では、「運営面について」「訪問者の巡回相談スタイルに関する要望」「負担や難しさについて」「さらなる改善へ意欲」「事業自体への要望」の5カテゴリーの自由記述が得られた。

最も多かったのが、「運営面について」の9記述であった。本巡回相談は、複数の保育士による協議形式であるため、協議時間が足りないことや時間設定の難しさ、勤務時間内で交替で出るので理解内容

の足並みそろわない等、保育所（園）という、保育士がローテーションで交替しながら長時間子どもを預かる職場ならではの課題が挙げられた。訪問の際は、昼寝の時間帯や園児が減少する夕方から夜間にかけての時間帯を協議に充てる等、各訪問者が工夫を行ったが、それでも全員が長時間協議することは難しい。能率の良い協議形式の検討が必要と思われる。また、「訪問者の巡回相談スタイルに関する要望」に関しては、「もっと直接観察とその場でのアドバイスを増やしてほしい」「保育士の話をもっと聞いてほしい」「もっと遠慮せずにアドバイスして欲しい」「新しい視点でアドバイスして欲しい」など、訪問者の個別のコンサルテーション能力に関する要望が含まれており、個々の保育所（園）ごとの対象児の特質や保育士の実態を踏まえて、柔軟に運営できる資質が求められていると言える。

2 巡回相談スタイルに関するアンケート結果から

①については実施率、②③については得点率に基づいて分析する。①については実施率が66.7%以上であれば、対象となった24保育所（園）中の3分の2以上で実施した事を示している。②③④については、それぞれ得点率が75%以上であれば、実施園中4分の3以上の園が最高点の2点をつけたこととなる。そこで、これらの数値を目安に、実施度については66.7%以上であれば、「実施率が高い」、得点率については75.0%以上であれば、「得点率が高い」として解釈することとする。

(1) 観察場面

観察の場面では[1 気になる子どもの行動観察をする]項目が実施率において91.7%の高い数値を得た。行動観察は訪問者が対象児の実態把握をするためには必須の事項であり、巡回相談に欠かせない相談スタイルであると言える。

[4 その場で保育士のかかわりかたをアドバイスする]という項目の負担度は11.1%で、他の項目よりやや高めである。これは訪問者に自分の保育を見られているのに加え、横からアドバイスまでされるという行為が保育者に緊張を引き起こしたのだと推測される。またこの項目は観察とは異なり、その場の保育状況に左右されると共に、訪問者自体の保育に関する専門性にも影響を受ける。そのため実施率は37.5%と、低くなっていると思われる。

[2 気になる子どものいるクラスの活動に参加し、子どもに直接かかわる]ことは、実施園数が12園と多くはないが、子どもの変容についての役立ち度は75.0%であり、実施した園にとっては役立ち度が高かった。この項目も[4]同様、保育状況や訪問者の保育に関する技術に影響を受けるため、実施率は低くなったものと考えられる。この項目の役立ち度が高かった点について、訪問者が訪問時に短時間対象となる子どもに直接かかわったからといって、子どもの行動がそのことだけで変化したとは考えにくい。訪問者の関わり方が適切なモデルとなり、それを見た保育士が参考にして継続的に実践することにより、子どもの変容につながったものと考えられる。このように具体的で明確な訪問者のモデリングが含まれる相談スタイルは有効性が高いと思われる。

(2) 協議場面

[6 気になる子どもに関係する数人の保育士と協議をする][7 直接担当していない保育士を含んだできるだけ多くの保育士と協議をする]の複数の保育士との協議に関して、子どもの変容の役立ち度でそれぞれ76.3%、76.9%、高い評価が得られている。また[7]は保育技術の向上に関しても76.9%と高い評価を得ており、この項目が子どもの変容だけではなく自身の保育技術の向上にも関連していることが分かる。これらの結果から巡回相談において、担任と訪問者のみではなく、複数の保育士で気になる子どもについて協議することが子ども及び保育士の変容につながることを示している。表2に示したアンケート1の自由記述の中に「自分たちの考え方が異なった時にその違いを保育力として受け止めることができた」という記述もあったように、複数の保育士での協議は保育士が互いを認めあい、新しい支援方法を見いだすために効果があったものと考えられる。しかしながら、[7]の実施率は、54.2%であり、効果が高くとも、多くの保育士が集まって協議する機会を上手く設定することの難しさが妨げとなっていると考えられる。

[8 分析&支援シートを用いて協議をする]は実施率が83.3%と高く、かつ、子どもの変容で75.0%、保育技術の向上で80.0%と共に高い評価を得ている。先に述べたように、支援シートを利用しての子どもの行動の分析は保育士らにとって、自ら協議し、支援方法を考えるために役に立つ方法であったと考えられる。

また協議場面では実施率が66.7%を超えている項目が多かった。中でも[9 保育士のとらえている子ども像の聞き取りをする] 91.7%、[10 チェックリストに基づき、子どもの行動特徴について話し合いをする] 91.7%、[11 成育歴や家族歴、現在の家庭状況を把握し、分析をする] 95.8%、[12 気になる子どもの発達の状況や特徴について話し合いをする] 95.8%、[13 行動が起きやすい保育場面について分析する] 95.8% [14 行動の意味について検討する] 95.8%、[15 行動への具体的な対応方法を検討する] 100%、[16 支援後の子どもの問題行動の変化の確認をする] 95.8%と実施率が90%を超えていた。これらの項目は、保育所（園）で、実施しやすく、保育所（園）長が考える保育士たちのニーズに対応しているスタイルであると考えられる。

さらにこれらのうち、[13 行動が起きやすい保育場面について分析する] [15 行動への具体的な対応方法を検討する]に関しては、子どもの変容に関する役立ち度が76.1%、77.1%、保育技術の向上が76.1%、79.2%と、どちらも75%以上の得点を得ており、保育士にとって役に立っていることが分かる。これらは、表1で示したアンケート1の結果でも高率であった、子ども理解の促進と対応方法の改善に直結する項目であることから、役立ち度も高いものと思われる。

また[18 子どもに分かりやすい言葉かけの仕方を検討する]は、実施率87.5%、子どもの変容81.0%、保育技術の向上81.0%と、全てにおいて80%以上であった。このことから保育士にとって子どもへの言葉かけの検討が大きな意味をもっていること、評価対象として大きな位置づけにあることが考えられる。

また同様に、[22 保育士同士の連携協力のしかたについて共通理解する]という項目は、実施率が70.8%と高く、子ども変容にも79.4%、保育技術の向上にも85.3%と、役に立ったと判断される。保育士という職業は普段から職員同士連携して保育を行わなければならないが、他のクラスの保育士らと一人の子どもについてじっくり話し合うという機会を持つことは、先にも述べたように、勤務体制上なかなか難しいと推測される。そのような中であって本巡回相談で実現した保育士による協議は、支援シートを活用しながら子どもの実態把握だけでなく、支援方法の共通理解を生み出す仕組みをもっており、

その結果、子ども変容と保育技術の向上にも役立ったものと思われる。

一方、実施するにあたって負担があったという評価に関してはどの項目も得点率は低く、実施するにあたって負担が大きいと捉える協議スタイルはなかった。しかし、支援シートに関しては17.5%と、他の項目に比べると飛びぬけて高い数値となっており、先のアンケート1でも同様の結果が示された通りである。しかし、分析&支援シートが子どもの変容と保育技術の向上の役立ち度で高い評価を得ていることも事実であり、今後、このシートを有効性の高さを維持しつつ、負担が少なく、使いやすいものに改良して活用することが求められる。

(3) 訪問者からのアドバイス、その他

[27 気になる子どもを見る時の保育士が気づかなかった視点を新たに提案する] [29 支援方針や保育方法を検討する際の観点を提示する]の2項目は、実施率、子どもの変容、保育技術の向上について、それぞれ前者が79.2%、78.9%、81.6%、後者が75.0%、75.0%、75.0%と、ともに高い数値を得た。この巡回相談の場で新たな視点をもたらすことの効果については、アンケート1の自由記述からも保育士の「子どもをとらえる観点が拡大・改善したこと」「子どもの見方が変わったこと」として指摘されている通りである。

[31 子どもへの関わり方の基本的な理論に関する解説をする]、[32 気になる子どもへの関わり方のロールプレイングをする]については実施率が54.2%、25.0%と低くなっているが、子どもの変容についての役立ち度はそれぞれ80.8%、75.0%、また保育技能の向上に対する役立ち度はそれぞれ76.9%、83.3%と高くなっている。この2つの項目は訪問者の高い技術が求められる項目であるため実施率が低い、実施できた場合には高い効果が得られる相談スタイルであることが分かる。

[33 保育士が現在行っている関わりが子どもに与えている影響について伝える]、[34 すでに行っている支援内容や方法に対して肯定的な評価をする]、[35 保育士の努力に対するねぎらいをする]については、それぞれ実施率が75.0%、91.7%、87.5%と高くなっている。役立ち度はいずれも60%から70%前半と必ずしも高くないが、これらは、表2に示したアンケート1の自由記述のカテゴリーにもあるように保育士の精神面について直接影響を与

えると思われる相談スタイルである。これらの項目の実施率の高さは、日頃、迷いながら気になる子どもの保育に取り組み、自信の喪失や不安の中にある保育士に対し、適切な対応については理論的な裏付けをもってその妥当性を保障し、その努力を認めることが、保育士が求める巡回相談の大切な役割であることを示していると考えられる。

その他には、[39 保護者との連携の方法についての検討をする]が70.8%と高い実施率であった。保護者との連携に関しては、保育現場に高いニーズがあることが推察される。保護者対応のケースは、多岐にわたる要因を含んでおり、事例の個別性が大きい。また、本巡回相談では、あくまでも気になる子ども自身の保育に関するコンサルテーションを旨としており、それに関連する事項について、保護者との連携を検討するスタイルを取っている。保護者自身を対象として取り上げる形での協議は行っていない。よってこの項目に関しては、実施率に比べ役割立ち度の高さにはつながりにくかったと考えられる。

V ま と め

1 効果的な巡回相談スタイルについて

本研究では、実際の巡回相談に参加した保育所(園)の所(園)長を対象とした2種類のアンケートから、保育現場で求められている、効果的な巡回相談のスタイルについて検討した。その結果、効果的な巡回相談スタイルには、以下の要件を含む必要があると考える。

まず1点目に、担任と訪問者のみのコンサルテーションではなく、訪問者のファシリテートにより、複数の保育士で協議する仕組みを取り入れることである。それにより、保育士が意見を出し合う中で、気になる子どもの見方や保育方法に関する新しい視点やアイデアを考え、それらを共通理解して、協力しながら保育を進めることができるようになることに役立つ。保育士たち自身で支援方法を考えるので、保育士は複数の視点から視ることの重要性に気づく。また、自分たち自身で多様な解決策を見出し、実践することにより保育を行う保育士の自信につながると考えられる。

2点目に、上記のような仕組みを支えるための枠組みを提示することである。本巡回相談では、チェックリストで対象となる子どもの発達の特性を複数の

保育士で評価し合い、さらに、支援シートを用いて、子どもの行動を保育環境や保育士のかかわりとの関係で分析することで、保育士自身が子どもの気になる行動の意味を理解して、支援方法を具体的に考えることができるようにした。このような、保育士の協議を支えるアイテムを取り入れることにより、保育士らが自ら問題解決に向けて検討できるようになった。そして、巡回相談が終了したのちも、その仕組みを使いながら、継続して支援を行える見通しをもつに至った。このように、巡回相談においては、保育士集団が協議しながら、気になる子どもの保育を改善する具体的な手法を提案し、それに基づくコンサルテーションにより、PDCA サイクルを組み込んだ支援体制を保育所(園)内に構築するように促す必要がある。

3点目に、保育士の対応が子どもにどのような結果をもたらしているかを分析し、そこに含まれる効果的な内容について、訪問者が理論的な裏付けをもってその妥当性を保障し、肯定的な評価を行うことである。このことは、保育士の自信と意欲につながり、上記の1・2点目に示した保育士主体の協議による支援体制を支えることとなる。

4点目に、気になる子どもの実態の理解や保育の現状について、訪問者が、保育士が見落としていたり、気付いていない視点の提案をすることである。これは、訪問者が具体的な支援方法を指示するのではなく、保育士が自ら子どもを捉えなおし、その保育を改善するための検討を行う際に、視野を拡大するためのヒントを示すことである。これもまた、3点目に示したように、保育士主体の協議による支援体制を支えることにつながる。

5点目に、負担感の少ない巡回相談の場を設定するため、対象保育所(園)の実情に応じた訪問体制をアレンジすることである。アンケート結果によれば、今回の複数回の訪問は「待ち遠しく」「時間が足りない」、保育活動の観察は、「もっと見てほしい」、支援シートの活用は、「継続して使いたい」と感じられる一方で、いずれも保育士にとって負担感が高いものであった。多忙を極める保育現場では、効果があると分かっているにもかかわらず、十分機会を設定することが難しい現状があることが分かる。保育園の規模や保育士の構成、勤務状況を踏まえつつ、上記の1~4に示した機能を果たせるように、訪問回数や時間、協議の進め方など、柔軟な対応ができるようにする

必要がある。

2 今後の課題

本研究において、質問紙の回答者は実際に保育を行った保育士ではなく、保育所(園)を代表する所(園)長であった。そのため、保育所(園)全体としての役立ち度や負担度を把握することはできても個々の保育士がどう感じたかまでは十分明らかにできなかった。実際の巡回相談時に訪問者と直接かかわるのは個々の保育士であり、役立ち度や負担度は個々の保育士の視点から、検討することがより現場の実情に即したものとなるはずである。有効性の高い巡回相談の在り方を探るためには、今後、個々の保育士に巡回相談でどのような変容が起きたのかを明らかにしていく必要がある。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいた事業の対象園である保育所(園)の所(園)長はじめ、保育士の方々、また事業の訪問者であるA県臨床心理士の方々、A県事業担当者の方々に心から御礼申し上げます。また、データの入力と分析にあたり、本学卒業生の菅原鈴子氏に多大な尽力をいただきました。御礼申し上げます。

引用文献

- 郷間 英世, 圓尾 奈津美, 宮地 知美, 池田 友美, 郷間 安美子(2008) 幼稚園保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究, 京都教育大学紀要 113, 81-89
- 権藤 桂子.(2006). 障害 D-3 小野市の障害時統合保育における巡回相談の現状 日本教育心理学会総会発表論文集(40), 415
- 秦野 悦子(2009) 保育巡回相談で出会う倫理問題とその対応, 白百合女子大学研究紀要, 45, A83-A104
- 浜谷 直人・秦野 悦子・松山 由紀・村田 町子(1990) 障害児保育における専門機関との連携: 川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴, 障害者問題研究, 6, 42-52
- 浜谷 直人(2005) 巡回相談モデルはどのように障害児統合保育を支援するか: 発達臨床コンサルテ-

ションの支援モデル, 発達心理学研究, 16(3), 300-310

- 日高 希・橋本 創一・秋山 千枝子.(2008) 保育所・幼稚園の巡回相談における「気になる子どものチェックリスト」の開発と適用 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 59, 503-512
- 小林 真・水内 豊和・尾崎 康子・阿部 美穂子(2009) 幼児用発達障害スクリーニング尺度の開発(3) - 本調査のための尺度作成 -, 日本保育学会第62回大会発表論文集, 183.
- 三山 岳(2008) 統合学童保育の巡回相談に求められる支援ニーズ: 都内のある自治体における学童保育指導員への質問紙調査から, 発達心理学研究 19(2), 183-193
- 西本 絹子(1999) 学童保育所の障害児保育における巡回相談, 日本教育心理学会総会発表論文集(41), 39
- 大村 禮子(2010) 保育の場における発達支援一協働体制の確立に向けて一, 淑徳短期大学研究紀要 49, 141-159
- 矢吹 美美子(1996) 保育園における相談活動 I: 保育園巡回相談における相談活動の構造と相談内容の類型, 日本保育学会大会研究論文集(49), 184-185
- 米田 一実(2007) 統合保育を行う保育士が臨床心理士に望むこと, 龍谷大学大学院文学研究科紀要 29, A99-A129
- 吉田 ゆり, 岩元 正知, 林 愛子(2007) 幼稚園保育園における巡回相談のあり方に関する一考察 ~ 鹿児島市幼児教育相談・幼児保育相談の試みから ~, 国際人間学部紀要 13, 117-130

(2012年10月22日受付)

(2012年12月19日受理)

